



# NEWS

## きのくに

2016〈春号〉  
Vol.22【1】

p1 地域活性化と「ワークショップ」 大澤 健  
p2 防災～人とのつながり～ 幾島浩恵  
p3 女性がふるさとをデザインするとき 勢古口千賀子  
p4 地域循環型農業「熊野米プロジェクト」に取り組み 田上雅人  
p5 アートが地域を創造する 鈴木裕範  
p6 地域づくりネットワークほか、編集後記

きのくに活性化センター 発行責任者／中田肇 発行日／2016年3月 〒646-0011和歌山県田辺市新庄町3353-9 BIG・U内 TEL&FAX0739-26-9670 <http://www.aikis.or.jp/~aoi-kii/>

## 地域活性化と「ワークショップ」

和歌山大学経済学部教授 大澤 健



和歌山大学に赴任して以来、和歌山県内外で地域活性化のお手伝いをしてきました。特に去年は県内の仕事が多く、御坊市の「御博(御坊・日高博覧会)」や、みなべ町の梅農家研修会などにかかわりました。

こうしたお手伝いではよく「ワークショップ」をやります。ワークショップとは、従来とは異なった新しいタイプの会議のやり方です。実際に参加された経験のある方もいるでしょうし、名前は聞いたことがあるという人も多いでしょう。

どのへんが「新しい」のかというと、まずworkshop＝作業場という言葉のとおり、何らかの実践的な作業が伴います。多くの場合、付箋や模造紙を使って何らかの成果物を協働して作り出します。私がよくやるのは「〇〇の良いところ」といったテーマで、地域の魅力をもう一度みんなでリストアップしていく作業です。付箋にどんどん地域の魅力や宝物を書いて、貼りなおしたり、色を塗ったりしながらまとめていきます。

書いたり貼ったりといった作業は、会議へのみんなの参加を平等化しながら、主体的な参加意欲を引き出していくうえで非常に効果的です。従来の会議では、発言は一部の人に偏りがちで、声の大きな人の意見がまかり通ります。他の人は発言する勇気を持たずに無言になるか、最初から無関心で隙あらば寝ようとしています。ワークショップでは、こうした参加態度は許されません。というより、作業自体が楽しいので、誰もが積極的に意見を書いて参加しようとしています。発言の機会が保証されて、みんなに聞いてもらえるならば、人は積極的に会議に参加するものなのです。

つまり、ワークショップの最大の



メリットは、人と人とのコミュニケーションの質を変化させることにあります。従来型の会議では、「正解」を言うことを求められ、お互いに自分が正解であることを主張しながら、最後は多数決…。そんな小学校の学級会風の会議が、地域社会の意思決定の場にも深く浸透しています。こうした旧弊をぶち壊して、お互いの意見を尊重しながら、多様な意見を自由に出し合って、未知の答えを協働作業で作りに出していく、これがワークショップの神髄です。たとえば、先ほどの「良いところ」は、ひとつの「正解」があるわけではありませんし、それぞれの人が考える「良いところ」をお互いが尊重することが大事です。御坊でのワークショップでは、こうした多様な魅力を活かしたまちづくりをしようという意見にみんなが賛同して、「御博」を開催することになりました。エリアも日高郡全域に拡大して、これまでご縁のなかった多

くの人たちが主体的・積極的にかかわることで、大成功の裡におえることができました。

地域振興のお手伝いとして私がワークショップをよくやる理由は、現在の地域活性化に最も必要なのはこうした発展的なコミュニケーションだからです。一昔前までは、活性化への「正解」は誰かが教えてくれました。東京などの大都市から誘致・誘導するか、他所の成功事例を模倣すればよかったからです。しかし、今の地域活性化には普遍的な「正解」がありません。地域それぞれで正解が異なるので、自分たち独自の正解を見つけなければならないのです。そのためには、なるべく多くの人たちが主体的な参加・行動意欲を持って、そうした知恵とやる気のある人たちが協働作業できる場を作り出していかなければなりません。人と人との新しいつながりをつくり、地域の人たちが協働できる場をつくる、ワークショップにはそんな深い意味があります。

シリーズ 地域をつくる女性たち⑬

## 防災～人とのつながり～



看護師・防災士・上富田ふれあいルーム講師 幾島浩恵

神戸の病院で看護師として働いていた時、阪神淡路大震災に遭いました。

神戸に残って復興の手伝いをするか、それとも長年の夢をかなえるか悩み、結局海外をバックパッカーで旅することを選んだけれど、復興に関わることが出来なかったことがずっと心に引っかかっていました。

和歌山で結婚し、親戚も友達もないこの地で、東南海・南海地震から子ども達を守りたいと思い、平成18年に防災士の資格をとり、同年から講師を始めた「上富田ふれあいルーム」(毎週土曜日、朝来小学校の3～6年生の希望者があつそ児童館に集まり、手芸、ガラクタ工作、季節

のイベント、英語活動などを楽しむ)に、防災教室を取り入れることにしました。

平成26年度は内閣府の「防災教育チャレンジプラン」に採択され、一年を通じて、災害時に子ども達が「衣・食・住・災害時要援護者への配慮ができる」事を目標として、月ごとの行事に結び付けて、楽しみながら学ぶことができる27種のプログラム「上富田ふれあいルーム 防災年間計画!」を考案、「防災教育優秀賞」を受賞。防災甲子園でも「フロンティア賞」を受賞しました。

防災の大切さを子どもに伝えれば、親に伝わり、祖父母や兄弟、近所の

おじさん、おばさんにも伝わる。大きくなれば、自分の子どもにも伝える。上富田ふれあいルームは10年になり、避難所宿泊体験や阪神淡路大震災の語り部は6年、小学校や保育所での英語劇(Jelly Beans)は12年になりました。

最近出会った「ウィークタイズ」という言葉は、「うすいけれども広くてゆるやかな信頼でつながった人間関係」という意味で、「自分とは異なる状況に生きる、自分とは異質な人たちとのゆるやかな信頼関係を持つことが、本当に自分がやりたいことを見つけるきっかけを与えてくれる」と書かれていました。

全く関係ないと思っていた事柄が、ふとつながる瞬間がある。他人だった人が、これらの何かを通じて、いきなり身近な人になる瞬間がある。何も極めたものはないけれど、広く、浅く、これでいいのかなと思っています。

スマトラ地震で被害を受けた、インドネシアやスリランカ。台風ヨランダによる被害を受けたフィリピンを訪れた後は、海外の災害復興支援にも関わりたいと思うようになりました。でもまずは、「上富田町は大きな災害の時に、一人も犠牲者を出さなただけでなく、近隣の被災者への援助ができたそうだと」言われるように。もちろん、次は「上富田」の所を「田辺・西牟婁」、「紀南」そして「和歌山」へと広げていきたいと思っています。

私の中では、神戸は今でもガレキのままです。この地をあのような姿にしないため、少しずつできることを続けていきます。



シリーズ 地域をつくる女性たち⑭

## 女性がふるさとをデザインするとき 新宮市魅力発信女子部

新宮市商工振興課企画員 勢古口千賀子

新宮市魅力発信女子部は、女性目線で豊かな観光資源に恵まれる新宮市の魅力を発掘し紹介する情報発信に取り組んでいます。市内の魅力あふれるいろんな人たちやスポットをウェブマガジンで紹介することによって、新しい素敵な出会いや新しい旅のスタイルを楽しむ人が増え、そして「女性が来たくなるまち 新宮市」のPRにつなげていきたいと考えています。

この取り組みに先立ち、平成26年度から女性職員4人の課が設けられたことをきっかけに、情報発信の一つとしてニュースレター「新宮通信 SNG4」を発行しました。旅行をし、いろんなおいしいものを食べたりおしゃれなお土産を買ったり、旅の決定権をにぎるといわれる女性。女性が行くところに男性も付いてくるのではないかと、定番とは違う女性が

らの情報発信をずっとやってみたいと思っていました。4人でそれぞれ自由に自分たちのお薦めスポットやお気に入りのものを紹介。それが日本広報協会の広報紙で取り上げられ、広報コンクールの企画部門で入選しました。

ニュースレター作成から、さらに取り組みを発展させたいと考えたのが、魅力発信女子部です。この企画は、当初無理だと思ったこともありましたが、地方創生事業の一つとして認めてもらい実現することができました。決定してからも女子部の部員はまったくの無償ですから、公募したら申し込んでくれるのだろうか、興味を持って取り組んでくれるのだろうかと不安はありました。それが、実際に募集してみると20～40歳代までの民間と行政の若い女性35人が集まり、取り組みがスタートしました。平均

年齢33歳、特に行政職員は同僚女子職員が頑張ってくれたこともあり20歳代が中心です。

作成するウェブマガジンは「新宮人」。最初のワークショップでは「魅力的な新宮人」の情報を出しあい共有しあったほか「新宮の魅力、新宮の宝」となりそうな企画アイデア出しを行いました。若い女性ならではのアイデアが次々飛び出し大変盛り上がりました。紹介する魅力的な新宮人も女性に特化し、女性商店主や観光ガイドなど約30件。企画案は、熊野川町の自然と楽しみ方・新宮のおしゃれ女子・新宮のお寿司・新宮女子の新宮弁・新宮の偉人逸話などを紹介する5つのチーム。ワークショップ以外でも、それぞれのチームごとにfacebookやカフェなどで熱心に打ち合わせを行ってきました。作り上げた企画をチームごとにプレゼンして

ワークショップは終了。

現在「新宮人」のサイトでは魅力あふれる女性たちとチームによる企画を紹介しています。

今後、このプロジェクトがそれぞれの分野で頑張っている女性たちのネットワークにつながっていくことを期待しています。新宮女子がつくる、新宮女子でつくる、新宮らしい、新しい地域活性化デザイン。新宮女子の魅力発信力により素晴らしいプロジェクトにしたいと考えています。



最後列右が勢古口千賀子さん



## 地域循環型農業『熊野米プロジェクト』に取り組む

熊野米プロジェクト代表・株式会社たがみ専務取締役  
田上雅人

山、川、海。自然豊かな食材の宝庫、和歌山。和歌山には、鯖寿司、秋刀魚寿司、めはり、茶粥など、多くのお米を使用した食品が有るにもかかわらずお米は他県のものも多く使用されているのが状況で、中山間地の多い和歌山のお米は価格が安く品質も良くないという理由で見向きもされていませんでした。その結果、後継者不足、少子高齢化に伴い農業の担い手がなく、休耕田や耕作放棄地が増加し農地が荒れ、農村は厳しい状況に立たされています。

私の家は、田辺市湊で1944年から3代続く米穀業で、私は1989年、平成とともに家業に携わってきました。これまでお米の食文化へ、和歌山のお米を消費者に知ってもらうため、農業体験をして秋に収穫したお米を食べる活動などをし

てきました。ただ、農地を守り、米を作るだけではすべてのお米を売る出口は少ししかないのが現状です。だと、どうすればいいか？当社と農家さんが連携し新しい出口を作ればいいのではないかと考えました。それから2年手探りで取り組む中で田辺商工会議所からお話をいただいたのが農商工連携の始まりでした。

これが地域循環型農業『熊野米プロジェクト』のスタートです。プロジェクトは、田辺商工会議所の支援を受け、平成22年9月30日国の認定を受けることができました。そのころ、和歌山県で栽培されていないお米で風雨に強く倒耐性の高いコシヒカリに類似の丈の短い品種『ヒカリ新世紀』を栽培することにしました。プラス、地域性や新しい技術ということで県の農

業試験場の技術提供もあり、梅の調味液を利用して雑草の生育を抑え、農薬の使用を控えて栽培しています。そうして出来た新ブランド「熊野米」は、熊野の自然の中で育つ、生命力あふれるお米です。味は甘くて、つやつや。ねばりがあって、冷めてもおいしくいただけます。

新しいブランド米を使い、和歌山のお酢でシャリを作り勝浦のマグロをネタに和歌山のお醤油で頂くという地産地消の取り組みをさせて頂き、地域を面で捉えた活動も増えてまいりました。農家さんとの連携を続ける中で農業はどれ位コストがかかり、本当に儲からないのかが気になり、当社も農業法人として農業に参入、私自身お米マイスターや農林水産省農産物検査員の資格を取得し取り組んでいます。すべての機械をレンタルし、草刈りなどの農作業に追われていますが、とはいえ手探りです、近所の農家さんに助けられて2年経ちました。この取り組みは6次産業化の総合化事業計画の認定を受け、今年新型トラクターを導入予定です。

わが社のコンセプトは“地域を見直し、新しい価値を創造し、モノとココロが一緒に流通する”です。これからの会社の在り方といたしましては、農家の皆様と共に出口を意識しつつ、さらにネットワークをひろげていきたいと思えます。熊野米プロジェクトの10周年にはお客様も含めた関係者の皆様と山に木を植えに行きたいと考えています。広葉樹の植樹は山を肥やし水を浄化し水田の恵みになります。果てはミネラルを含んだ水が海へと流れプランクトンが増え漁場も潤うのでは、と考えています。これからもふるさと田辺の地で、地域と農業と和食の文化を見つめ、農家さんとお客様とをつなぎ、共有・共感・共鳴できる企業でありたいと思っています。



# アートが地域を創造する

～アートプロジェクトの現在と未来～



和歌山大学南紀熊野サテライト客員教授  
鈴木裕範

和歌山県の北と南で昨年秋、2つのアートプロジェクトが開かれた。ひとつは、田辺市から発信された「紀の国トレイナート2015」で、JRきのくに線みなべ町岩代から新宮までの15の駅舎をアート空間に10月17日から約40日展開され、11月の3日間臨時列車「紀の国トレイナート号」が運行、来訪者は各駅停車の列車でアートめぐりを楽しんだ。おととしに続き2回目の開催となったプロジェクトは、20人を超すアーティストとJR西日本(JR初めての試み)、地域の人々と来訪者が一体になって創りあげている。



紀の国トレイナート号の車内

もうひとつは、和歌山市・海南市・高野町を舞台に9月13日から一カ月開かれた「ワカヤマサローネ2015」である。木造建築の元旅館や漆器会社の倉庫、リノベーションした歴史的建築物などを会場にしてアーティストの作品を展示した。市民が実行委員会を立ち上げての初めての開催だったが、「パスポート」(有料)を購入し、会場をめぐりアート鑑賞する市民の姿が見られた。いずれも「アートで旅」がコンセプトになっている。



消える田辺駅舎に描く 榎貴美

「アートプロジェクト」は、近年全国各地で注目されている「アート×地域×人」の取り組みである、野外

など公共的空間でアートを展示し(Public Artと呼ばれる)、アートが作家と空間(地域・場)と人(住民・観光客)をつなぎ地域の価値を高める。「Contemporary Art」(現代アート)ーコンセプチュアルなランド・アートや建築の壁面や音、光などを利用したインスタレーション等一の「訴

求性」を、都市の創生や中山間地域、離島の再生、学校の活用などさまざまな形で問う試みである。担い手はアーティストと地域住民、決められた地域で実行委員会を組織し、プロデューサー、ディレクター、アーティスト、建築家をはじめ企業経営者やまちづくり団体、会社員、学生ら様々な人が参加している。



シードトゥキャンパス 中田耕平



棚田 窓の外にイリヤ&エミリア・カバコフ

「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」は、新潟県・十日町市・津南町の地域づくりを目的に2000年から始まった3年に一度開かれている世界最大級の国際芸術祭は6回目になる。芸術祭には国内外の



光の館 ジェームス・タレル

現代芸術を代表する作家らが出品、来訪者は広大な中山間地域に点在する作品に会いに行く。会場へのアクセスはバスや車、自転車か歩き。美の鑑賞者は、世代を超え民族も超える。

瀬戸内国際芸術祭は瀬戸内海に浮かぶ12の島などを会場に開かれる現代アートのトリエンナーレで、ことしも3月20日に幕を開けた。人口減少・高齢化が進む瀬戸内の再生を目的に2010年に始まった。豊島の美術館や犬島の集落景観などアートの島めぐりの来訪者は前回のべ90万人を超えた。

アートを活用した試みに、自治体や企業が関心を寄せる。「妻有」「瀬戸内」はなぜ、国内外から注目されるのか。第一はアートの質の高さと国内外への発信であり、作品を楽しむ鑑賞者がいる。プログラムには学びと楽しみがある、田園や島という地域に根差した暮らしと時間がアート空間になっている。アートと旅の結合がアートじたいの「公共性」「多面的な価値」を再評価し、観光やビジネスの創出だけではなく、地域住民の自信とやる気を生み出している。

日本国内で取り組まれているアートプロジェクトはいま、2千ともそれ以上ともいう(松尾豊氏調査)。それらがどのような展望を切り開くか、地域の自然風土に立脚した本物だけが地域の未来を開く。

## 地域づくりネットワーク和歌山県協議会が研修交流会

和歌山県は豊かな自然に恵まれ、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に代表される歴史・文化・伝統が受け継がれるなど、幅広い地域資源が存在している。こうした地域資源を活用した地域づくり活動の発展を目的として、2月5日、田辺スポーツパークにおいて、地域づくりネットワーク和歌山県協議会の主催で研修交流会が開催された。参加者は、26の団体や企業と9市町村から計106名にのぼった。

「地域づくり活動団体と行政との協働による地域創生」をテーマとした講演では、元小樽市職員で東京農業大学教授の木村俊昭氏が、「地域を徹底的に知り気づくことから行動が生まれる」ことを力説した。グループワークでは、参加者が活動を紹介、地域づくりについて語り合った。



地域づくりネットワークのグループワーキング

## 和歌山大学南紀熊野サテライト設立10周年

和歌山大学の南紀熊野サテライトが田辺市新庄町のBig・U内に開設されてから10周年になるのを記念して、12月13日にシンポジウムなどが開かれた。

南紀熊野サテライトは、2005年4月に開設し、これまで大学・大学院の授業の開講や地域研究の拠点としての役割などを担ってきた。挨拶で、和歌山大学の瀧寛和学長は地域とともに発展する大学に向かって取り組むことを強調した。

記念事業では和歌山大学教育アドバイザーの山田桂一郎さんの講演や田辺市、上富田町、北山村の3自治体首長による討論のほか、地元高校生による演技や物産の展示販売などが行われた。



南紀熊野サテライト設立10周年記念式典

## 茶人川上 不白を偲ぶ茶会9年目に

新宮市が生んだ茶人川上 不白を偲ぶ茶会が、茶道表千家流音無会(会長築紫充代さん)によって昨年11月29日にゆかりの日蓮宗本廣寺で開かれた。

不白は江戸時代を代表する茶人で江戸千家の流祖。茶会は、2007年の不白没後200年を機にふるさとの生んだ大茶人の遺徳を偲んで始まり、今回が9回目(後援新宮商工会議所)。

偲ぶ会は、本廣寺本堂で清水文雅住職による読経が流れるなか献茶式が行われ、不白像に御茶が供えられた。そのあと催された記念茶会には、江戸千家宗家川上紹雪若宗匠、新宮商工会議所関会頭、きのくに活性化センターの中田会長らが入り、秋の日のお茶を楽しんだ。

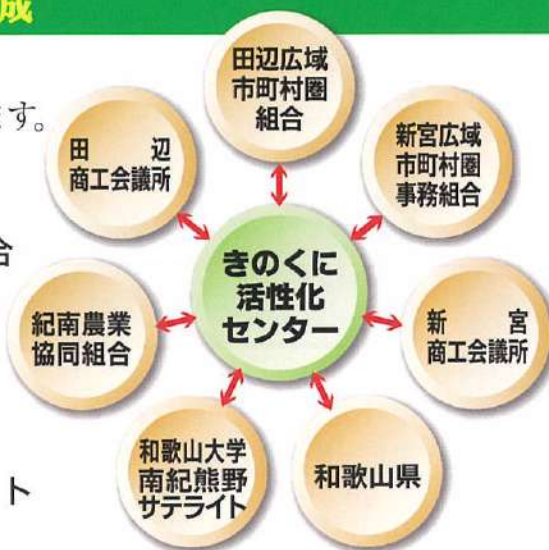


茶人川上 不白を偲ぶ茶会

## きのくに活性化センターの構成

きのくに活性化センターは、以下の団体・機関で構成されています。(2015年6月30日現在)

- 田辺周辺広域市町村圏組合
- 新宮周辺広域市町村圏事務組合
- 田辺商工会議所
- 新宮商工会議所
- 紀南農業協同組合
- 和歌山県
- 和歌山大学・南紀熊野サテライト



## 編集後記

「人口減少社会」「地方自治体消滅論」が言われるなかで、住民自治の確立、コミュニティの再生、持続的な地域の発展をどう図るかがますます重要になっています。住民の手でどのように地域を創っていくのか。そこで、この号は「ワークショップ」「つながり」をキーワードに編みました。(す)